

XIV 川崎遺跡第20次調査

所在地 川崎字宮脇153-5
 原因 個人住宅の建設
 調査面積 257m²
 調査期間 H17.11.22.～12.2.
 調査担当 柳沢健司
 調査補佐 藤牧守絵
 検出遺構 住居跡 1 軒
 出土遺物 土師器甕破片、土師器坏破片

概要 川崎遺跡は市域の北側を占める川崎舌状台地一帯に立地する旧石器時代にはじまり中近世に至るまでの15万m²におよぶ広範囲な複合遺跡である。19次の本調査と宅地添地区の5次にわたる調査で、竪穴住居跡は、縄文時代前期（関山・黒浜期）が21軒、後期（称名寺期）が1軒、古墳時代前期が2軒、同後期が6軒、奈良平安時代が41軒確認されている。そのほか、掘立柱建物跡6棟、地下式坑6基が確認されている。

今回の調査区の立地は、舌状台地のほぼ中央部、標高12mの地点である。11月22日、北西土地境界杭を基準に北側土地境界線に沿って東西方向1～11区、南へ向かってA～G区を設定して第2区列より1区おきに表土除去作業を行った。第6区列で南北方向に走る溝を確認し、C-4区から攪乱中より土師器甕の破片が集中的に出土した。またE-4区で遺構プランとみられる黒褐色土のひろがりが見られたので、隣接する第3区列と第5区列およびD-4区の表土を除去し、調査範囲の拡張を行った。

24日、竪穴住居跡を1軒確認したので、プランを確認し、写真撮



川崎遺跡第20次調査表土除去作業風景（南より）



第18図 川崎遺跡第20次調査区位置図(1/5000)



影を行った。A－6区、A－9区も遺構が所在する可能性があったので、西隣のグリッドの表土除去を行った。

A－5，6区では、第6区列を南北方向に走る溝が北西方向へ屈曲して延びていることが確認された。一部覆土の除去を行ったが近世の遺物が少量見られたこと、断面はゆるやかなU字からV字に変化し、深さは確認面より30cm程度であったが、覆土の状況や遺構の壁面の様子から調査すべき遺構とは見なせなかった。

設計業者及び施主と打ち合わせて28日より本調査に着手した。

住居跡の覆土を除去し、土層断面図を作成し、作業風景及び遺物が出土している状態で全景写真を撮影した。

11月30日、カマドと「貯蔵穴」部分の調査を行った。「貯蔵穴」部分は攪乱が激しかったため、攪乱を除去して、「貯蔵穴」の調査を行った。12月2日、完掘状況の全景写真を撮



第19図 川崎遺跡第20次調査区全測図(1/400)



川崎遺跡第20次調査第1号住居跡全景（南東より）

（前頁）川崎遺跡第20次調査第1号住居跡調査風景（西より）

影し埋め戻して器材を撤収した。

◆第20次第1号住居跡

確認面にて、北西～南東方向3.2m、北東～南西方向3.5mの見かけ上正方形に近い長方形である。主軸方位は、 $N-45^{\circ}-W$ で、北西壁の中央やや北よりにかまどを設ける。周溝は北東壁の南側と南東壁の東側に確認された。北隅に長径27cm、短径24cm、深さ45cmの楕円形の「貯蔵穴」が確認された。

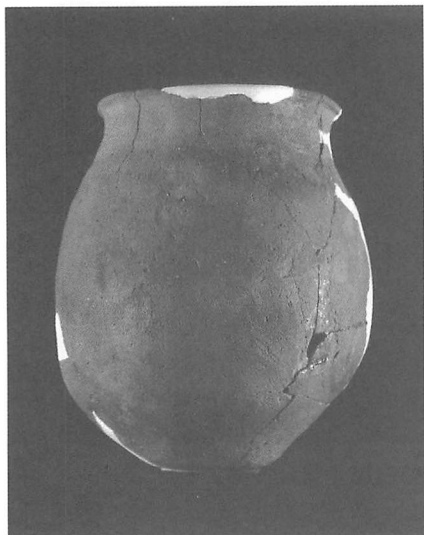
遺物は、かまど内に、口縁部が欠損した薄手の長胴甕の内部に伏せた状態の土師器坏が重なって2点ほぼ完形で確認された。長胴甕胴部下半の底部立ち上がり部分に倒れかかった石製の支脚が突き刺さった状態で確認された。覆土中から出土した坏は、赤塗りで底部から体部の立ち上がりに稜をもつが、かまどの長胴甕の内部から確認された坏は、丸く立ち上がる器形であった。かまど内の甕と坏の時期から住居跡の年代は7世紀前半から中葉と推察される。



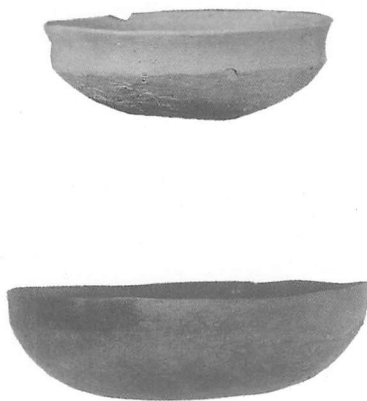
川崎遺跡第20次調査第1号住居かまど遺物出土状態（南東より）



川崎遺跡第20次調査第1号住居かまど土師器甕及び坏出土状態



川崎遺跡第20次調査第1号住居出土小型甕



川崎遺跡第20次調査
第1号住居かまど出土土師器坏



川崎遺跡第20次調査
第1号住居かまど出土長胴甕